「愛国愛教」の中国ムスリム回族

高　明潔

中国のムスリム民族

中国には約二〇〇〇万人余りのムスリムがいる。アルタイ語族トルコ語派に属するウイグル族、カザフ族、キルギス族、ウズベク族、タタール族、サラール族、そして、アルタイ語族モンゴル語派に属するトンシャン族、ボウナン族、インド・ヨーロッパ語族イラン語派に属するタジク族、漢・チベット語族漢語派に属する回族といったように、数十の少数民族集団から成っている。

中国では宗教法というのはまだ成立していない。しかし、現行憲法三六条は「中華人民共和国の公民は宗教信仰の自由をもつ」と規定する。前述の十数の民族の人口数は、イスラーム教を信仰する人口として、これまでに国家が定めた「民族宗教」や「全民信仰」という基準にしたがって計上された統計結果である。

一九五〇年に、当時の周恩来首相は、全国政治協商会議第二回会議で「我が国では、宗教には二種類ある。ひとつは民族宗教で、例えば回教、ラマ教である。これらの宗教は民族問題と絡んでいるので、その宗教を尊重することは、その民族を尊重することに等しい」(『一九四九―一九九九新中国宗教工作大事概覧』一九五〇年部、六―七頁による)と述べている。

一九五四年の「関於過去幾年内党在少数民族中進行工作的主要経験総結」(過去数年内に党が少数民族の中で行った工作の主要な経験の総括について)には「それら民族全体が宗教信仰をもつ少数民族(例えば、回、チベット、ウイグルなどの民族)中の(共産)党員に対して、宗教儀式や生活習慣面において本民族の大多数の民衆に脱離しないように努めること」(『一九四九―一九九九新中国民族工作大事概覧』一九五四年部、一五三頁による)と規定している。

一九八二年の「関於我国社会主義時期宗教問題的基本観点和基本政策」(我が国社会主義時期の宗教問題の基本的観点と政策について)において、「我が党はすでに何度もはっきりと規定している。共産党員は宗教を信ずることはできない、宗教活動に参加してはならず、長期にわたっても(宗教信仰を)放棄しない党員には、離党勧告をする。この規定は全く正確であり、全党にとってすれば、今後も引き続いて貫徹して執行すべき

ある。現在の問題は、こうした基本事項は、全民信教の少数民族に対して、この規定を執行する場合は、実際の情況に照らして、適当な方式を採用し、単純なやり方をしない」（『一九四九―一九九九新中国宗教工作大事概覧』一九八二年部、三〇三頁による）と述べている。

このような「民族宗教」や「全民信仰」という現実から定められた基準によって、一般には、これら十数の民族集団の成員に対して、誰がムスリムであるか否かといった区別はしない。すなわち、これら十数の民族集団は、宗教集団を構成する諸要素の中の一つの「自然集団（家族・村落・民族）」として、中国のムスリム集団を構成するに至った。

タイトルとした「愛国愛教」という表現は、中国ムスリム人口の約半分を占める回族ムスリム（九八一万六八〇五人、二〇〇〇年の統計資料に依拠）が使用している用語である。この「愛国愛教」は回族ムスリムの理念を表しているのみならず、これまでの回族と中国の関係をも的確に反映しているといえるだろう。

イスラーム教のもとに生み出された〝愛国愛教〟

「愛国愛教」の「国」は中国、「教」はイスラームのことを指す。この表現は、「これ汝ら、信徒のものアッラーのお言いつけをよく守り、またこの信徒（マホメット）と、それから汝らの中で特に権威ある地位にある人々の言いつけをよく守るのだぞ」『クルーアン』（四：五九）の教え、および「愛国は信仰に属するものである」というマホメットの語りに由来とされている。

回族のルーツは、七世紀ごろアラビアやペルシアから唐（中国）にやってきた「胡人」や「蕃客」と呼ばれたムスリムにまで遡る。一〇世紀以降の「土生蕃客」や「五世蕃客」、一三世紀ごろの「色目人」と「回回」や「回人」、一五世紀以降の「漢語系の回回」、一七世紀から中華民族時代に「回民」と呼ばれたイスラームを信仰するムスリム集団である。中華人民共和国時代になると、この漢語系ムスリム集団が民族平等と宗教信仰の自由があるとした政策のもとに、ついに独自の民族集団である「回族」（回回民族ともいう）として認知され、その宗教信仰も法律上保護されるようになった。

外来文明や宗教信仰をもっていた回族は、中国社会や文化に溶け込みつつも、自らの固有文化を育みながら、中国の文化と融合し、中国の歴史や文化、国際交流活動に対し、多大な貢献をした。例えば、元代では、元朝に仕えたアラビア出身のムスリム天文学者ジャマルデンは、北京で七種類の天文

『クルーアン』の中国語とアラビア語の対訳（『中文訳解 古蘭経』馬堅訳、ファハド国王コーラン印製廠、イスラム暦1407年）

観察器械や「万年暦」を創った。アラビア出身のムスリムであるイェヒデルは、元朝の大都（今日の北京）を建設するための設計や建築プロジェクトを指揮した。また、明代では、ムスリム出身の回族である鄭和は、計七回に及ぶ東南アジア、インド半島、アラブ、東アフリカの三〇余りの国への南海遠征、そして、それによって古代中国と各国間の経済・文化の交流を促進したのである。

近代においても、回族は中国の文化・思想界に大きいな影響を与えた。例えば、ユーゴーやロマン・ロラン、スタンダールなどの著作を、最初に中国語に翻訳して、中国に紹介したのは回族出身の馬宗融であった。一九三五年にエジプトで出版されたアラビア語版『論語』は、当時エズハール大学に留学していた回族出身の馬堅（故北京大学名誉教授・イスラーム哲学研究者）であった。馬堅教授が訳したアラビア語版『論語』は、アラブ世界と中国との相互理解という分野にあって、重要な業績といえるであろう。

回族の祖先が漢語（中国語）を使い始め、それが定着したのは一五世紀の頃であった。明代初期、回族の祖先であった「胡人」や「色目人」といったムスリム集団は、明の太祖の詔による胡服胡語胡姓のすべての禁止という「漢化政策」に直面し、アラビア語やペルシア語と漢語を交えて、イスラーム教典を書き写す試みを行った。

明末清初になると、漢語を使いこなし、当時「回民」と呼ばれたムスリムの知識人が、イスラームの真諦を「東土」すなわち中国に伝えた。イスラームならびにムスリムに対する誤解、純化という目標のもと、中国本土の現実に照らして、儒学を中心とした仏教、道教などの中国古典思想をもって、イスラームに対する解釈を試み始

めた。イスラームを「清めかつ真実的＝清真教」とし、アラビア語やペルシア語のイスラーム原典を漢語に翻訳し、解釈した教典や著作が相次いで現れた。現在までに至って、いずれの著作も中国イスラームの名著と認知され、その中にあって、特に次の著作が取り上げられている。

『正教真全』（イスラーム真諦）

回族学者の王岱興（一五七〇―一六六〇）が明崇禎一五年（一六四二年）に完成し、出版した著作。イスラームを「真実で（正しい）永遠に偏れない宗教」（真久不偏）の「正しい宗教」とし、その教理を正確に詳細に解釈した著作と認められる。民国時代には、王岱興の『清真大学』『希真正答』と合わせて再版され、さらに一九八七年寧夏人民出版社に新たな標点版が出版されるに至った。

『清真指南』（イスラーム案内）

清代の著名な回族学者である馬注（一六四〇―一七一一）の著作である。イスラームの教義や教理、哲学や道徳、礼儀と規定を全面的に解明する名作とされる。馬注の解釈によって、イスラームがもつ神秘主義的な色彩、およびイスラームと儒学との関連について明らかにした。他の著作より中国ムスリムに愛読されているという。

『天方性理』

回族学者劉智（一六六二？）の中国語でイスラーム哲学を解釈した、最も代表的な著作である。「天方」は明代の文献におけるメッカやアラビア地域を示す用語である。劉智はイスラームと儒学のもつ二種類の理性学（人の性命と天理・人性の原理）の一致性に対する説明を重点にして、イスラームにある「天人性命」という学問を、中国哲学の分野に打ち立てた。「本経」と「図伝」という二部にわけて、「本経」には漢語とアラビア語を用いた注釈がある。

『天方典礼』

著者は劉智。イスラームの由来や構成と特徴、イスラームが崇拝するアッラーについて説明し、「信仰告白」がアッラーを理解するプロセスであるとして、そこに重点をおいて解説した著作である。その一部が教材として、現在中国各地のイスラーム経学院に使われている。

『天方至聖実録』

「至聖」はマホメットを指す。劉智がペルシア語の原著をテキストとして、アラビア語の資料を参考として、中国の編年体裁の記述方法を用いてまとめた、マホメットの伝記である。本書は民国初期に中国に滞在していた英国のキリスト伝教師によって英文に訳され、ロントンやニューヨーク、上海で出版された。その後、ロシア語やフランス語、日本語の翻訳版も出版された。

こうした一五世紀以降の「漢化」

という背景にして、回族の祖先は、イスラームを「東土」に紹介しただけでなく、いわゆる「中国的イスラーム」の基礎をも築いた。このようなプロセスにおいて、回族の中には官吏選抜のために設けられた科挙に専念し、それに及第して、朝廷の官僚となり、「士大夫」や「郷紳」となるといったことも、徐々に増えていった。

イスラームが、中国的にシンクレティク的に解釈されること、唯一の神アッラーに対する崇拝と天子（皇帝）に対する忠実という中国イスラームの様相について、前述の馬注の『清真指南』には、以下のように記されている（馬注著、余振貴標点『清真指南』寧夏人民出版社、一九八八年による）。

「天の子（皇帝）、民の父（皇帝）はアッラー（真主）の本来の姿で、（民の）痛痒の由来に関わる」（〝天之子、民之父、真主之真影、痛痒之所由関也〟）。また、「天は一時でも日なくてはならず、国は一日でも君なくてはならない。天下は国家なので、第一義的存在である。君と臣は父子のようなものなので、それも第一義的存在である」（「天不可一時無日、国不可一日無君。天下也、家国也、一也。君臣也、父子也、一也。」『清真指南』巻五〝忠孝〟二一四頁）。

「このため、アッラーは曰く、〝両親に従い親孝行すべき、たとえ両親はムスリムではなく、真主を信じなくとも、孝行をしなければならない〟」（「故真主喩云、〝順二親着、総二親是個外道、的実我的恕在那〟」『清真指南』巻五〝忠孝〟二一七頁）。

この馬注が解釈した「真主」と「君主」双方に忠実であれという思想、すなわち、ムスリムにとって、それら双方に忠実であるとすることは矛盾しないという観念をもとにして、現中国イスラーム教協会副協会長の余振貴教授は、それが「二元忠貞」（二元忠実）と定義するに至った。

一九〇六年に北京で創刊された『正宗愛国報』は、近代における回民の「愛国」を、はっきりと表明していた。同年、日本に留学していた回族留学生の組織であった留日清真会が、『醒回篇』の創刊号を発行した。「第一に、救国のために結集、団結し……、第二に中国のイスラームを改革する」といったように、まず「救国」という主張が優先して表明された。その後、そのメンバーの多くが帰国し、辛亥革命に参加し、民国革命の成功に大きな役割を果たした。

一九三五年にエジプトのカイロで出版されたアラビア語版の『論語』の前書きには、前記の馬堅教授の「私は中国人であり、ムスリムでもある。私は二重的な義務を負っている。つまり、公民的な義務と宗教的な義務であり、私は自らの最大限の努力を尽くし、中国

語が分からない、その他の国の人民を助けて、中国の哲学と文学を理解させるべく、同様に、イスラーム教の経典と著作を中国に紹介して、宗教内外の同胞が、皆イスラームの真諦を理解できるように、自らの最大限の努力を尽くすべく」（李振中著『学者的追求 馬堅傳』寧夏人民出版社、二〇〇〇年、六八―六九頁による）といった翻訳の動機が記されている。

この馬堅が述べた、中国ムスリム回族の「二重的な義務」と明清時代の馬注が解釈した回回の「二元忠貞」は、現在の回族ムスリムが掲げる「愛国愛教」と共通するものといえるであろう。

一九一二年、北京に中国回教倶進会が設立された。これは中国初の回族ムスリム全国組織であり、その主張は「教育を振興し、団結を固め、回族と漢族の友好」であった。この四〇年後、一九五三年に設立された中国伊斯蘭教協会は、『中国伊斯蘭教協会簡章』を公布した。その第一条は「本会を中国伊斯蘭教協会という名称とする」とし、第二条では「本会の主旨は、人民政府に協力し、宗教信仰自由の政策を実施し、イスラームの優れた伝統を向上させ、祖国を大切に守り、世界平和を保護することである」と規定した。この規定は中国ムスリムに引き継がれて現在に至っている。

ムスリムとしての回族と中国

「愛国愛教」のもう一つの側面、すなわち「愛教」という様相について述べる。

回族の成立史から、その社会・文化に体現されている一定の精神・社会的空間の位相を異にしている現実をみてみると、すなわち、中国にとって外来宗教共同体の構成員である回族は、漢語を用いることは、必ずしも彼らがイスラームという信仰を放棄したこととは結びつかないといえる。このため、彼らはイスラームという信仰を放棄しない限りでは、明朝以来、儒学を中心とした中国歴代の政治理念や主体文化との間では、平穏無事の状態を保ったともいえないであろう。

一五世紀の回回に対する「漢化措置」、回回側が取った「経堂教育」といった反応、一八世紀から一九世紀末における清朝の「回民抑圧策」のもとでの、各地の回民反乱とその反乱に対する清朝の残虐的な鎮圧、「回教を信ずる漢族」として位置づけられ民国時代の「辱教事件」（ムスリムを侮辱する事件）、およびそれに対する回族側の反発などが歴史に記録されている。

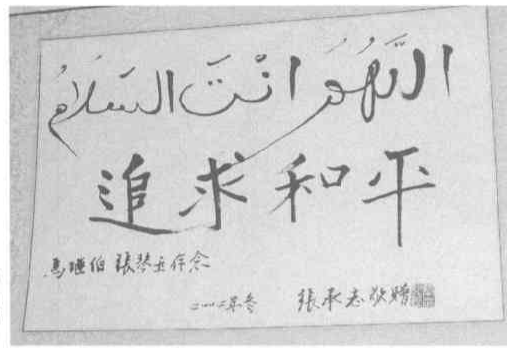
中華人民共和国時代では、回族が独自な民族集団として認定されたのも、その社会や文化の根底にあるイスラームによるものである。現代中国にはマルクス・レー

ニン主義や毛沢東の革命思想、階級論のような共産主義的な国家的イデオロギーもあれば、漢民族をも含む各民族の固有の価値観について、つまりは、宗教的イデオロギーも存在する。この二つのイデオロギーのもとに生み出されたダブルスタンダードは、つねに民衆の思想を混乱させたり、両者間の衝突を引き起こしたりした。回族の例を見てみると、一九五八年に西北地域の回族社会で「土地改革」を行う際、ムスリムにとっての共同財産であるモスクの財産を分割しようという改革に対する回族側の反乱とその反乱に対する弾圧、一九七五年雲南省沙甸村の回族の村民と毛沢東思想宣伝隊との間に起こした「沙甸事件」のような出来事もあった。

現在、回族は、中国人としての祖国における政治社会生活を除き、ムスリムとしてイスラームの基本である「六つの信仰・五つの義務」を維持している。仕事などに追われて暇のない回族は、特に若い世代や中年層の場合、五つの義務（信仰告白、一日五回の礼拝（金曜日には集合礼拝）、ラマダーン月の断食、喜捨、メッカ巡礼）の中に規定されている「一日五回の礼拝」などを実行できないのが現実である。しかし、少数ではあるが、筆者に対し「現在は、礼拝の時間はないが、定年後には、すでに定年している両親たちのように、恐らく毎日モスクに通いたい……」と話してくれたのは、聞き取る対象の全員であった。

また、回族であれば、男女問わず、生後、まず教長から「経名」と呼ばれる「宗教名」を授かり、学校に入学する際には、「大名」と呼ぶ漢族と同様な名前をつけること、回族同志の結婚および結婚式、メッカ巡礼（ハッジ）、葬式から、「豚肉を食べることの禁止」に至るまで、実際に、その生活のすべて

「愛国愛教」はイスラームのムスリムに対する忠告である
雲南省順城清真寺にかけられている「愛国愛教」の扁額
（林芸『聖潔的心旅』雲南教育出版社、1995年）



寧夏回族自治区西吉県の
回族の農家にかけられている
「追求和平」の書画
（2004年９月筆者撮影）

は、彼らにとっての「法則」、すなわちイスラームに従うものにほかならない。回族の文化はイスラーム的宗教文化体系に則るものといえる。

回族が、最も集まっている寧夏回族自治区をはじめとして、回族が集中している各地域では、都市、郊外、農村およびその規模に関わらず、回族独自のコミュニティが形成され、なかにはモスクを設けている。寧夏回族の村では、回族ムスリム同士がモスクを中心とした相互扶助の生活を送っているのが特徴的である。いずれの回族の農家においても、室内の西の壁には、刺繍で描かれた「天房」と呼ばれるメッカの「聖殿＝カーバ」(al-ka'ba) の織物が掛けられ、それに向かって礼拝をすることも日常的である。イスラームに従って「中国工商銀行伊斯蘭分行」（中国工商銀行イスラーム無利子銀行）でさえも、寧夏の呉忠市に設置されている。

「愛国愛教」を奉ずる回族は、イスラーム地域や国との友好交流を頻繁に行っている。また、一九九一年の湾岸戦争の際には、西北奥地の回族ムスリムは、「決死隊を結成して、イラク支援に行こう」という動きもあった。二〇〇四年現在、むろん中東情勢にも強く関心を払っている。中東情勢に対し、「どの宗教でも平和を求める聖的な存在なので、宗教の間では衝突はない、ムスリムは平和しか望まない……」と話すのである。奥地で質素な生活を送っている、ある回族の農家の居間の壁に貼ってある「追求和平」（平和を追い求める）といった書画がとても印象的であった。

「愛国愛教」という主張も、回族ムスリムが、中国から切り離れて「愛教」を語ることからではなく、その「愛教」が「愛国」と結び付き、彼らの根底にある平和を求め

るという理念から、もたらされたものである。それは、一九五二年に公表された「中国伊斯蘭教各族人民擁護平和」(中国イスラーム各民族の人民が平和を擁護する)といった声明のように、「我々は我が偉大な祖国を愛し、我々は我が革命の成果を大切にする。我々の偉大な利益は平和に脅威を与えない環境の中に我が祖国を建設し、我々の生活水準を高めることである。このため、我々が全力でアジアの安全と平和を守らなければならない。『クルアーン』に謂われた〝これ汝ら、信徒の者、みんな揃って平安に入れよ〟(二:二〇八)」という誓いである(『一九四九―一九九九 新中国宗教工作大事概覧』一九五二年部、七一頁による)。

平和を追い求める中国回族ムスリム

回族ムスリムの解釈では、「愛国愛教」というのは「平和を求める」というイスラームが唱える根本的な理念に由来する。そして、「平和を求める」という理念の根源は早期マホメットを中心としたムスリムとメッカ人の戦争から生み出されたものとされている。それは下記の主張に集約されている(馬堅著「美帝国主義是伊斯蘭教的死敵」(アメリカ帝国主義はイスラームの敵である)『人民日報』一九五〇年一一月二六日による)。

まず、イスラームに許される戦争は自衛的、抵抗的なものであり、許されないものは侵略的や攻撃的なものである。「汝らに戦いを挑む者があれば、アッラーの道において(「聖戦」すなわち宗教のための戦いの道において)堂々とこれを迎え撃つがよい。だが、こちらから不義をし掛けてはならぬぞ。アッラーは不義なす者どもをお好きにならぬ」(『クルーアン』二:一九〇)。

そして、抵抗については、「騒擾がすっかりなくなる時まで、宗教が全くアッラーの(宗教)ただ一条になる時まで、彼らを相手に戦いぬけ。しかしもし向こうが止めたなら、(汝らも)害意を棄てねばならぬぞ、悪心抜きがたき者どもだけは別として」(『クルーアン』二:一九三)。

「不当な目に遭わされた者が、相手に敢然と挑みかかることは許しが出てくる。そういう人たちはアッラーが助けて立派に勝たせて下さろう。すなわち、なんの罪とがもないのに、ただ〝我らの主はアッラーだ〟と言うだけの理由で住居から遂い出されたような人たちのこと」(『クルーアン』二二:三九―四〇)。

抵抗が必要なのは、抵抗がなければ平和をもたらせない。これについて、「もし、アッラーが人間どもをお互いに牽制し合うようにしむけ給わなかったら、この地上は腐敗し切ってしまったことだろう」(『クルーアン』二:二一五)。

「しかし向うが止めたなら、（汝らも手を引け）。まことアッラーは広大なで情深くおわします」（『クルーアン』二：一九二）。「もし彼らの方で平和に傾くようなら、お前もその方向に傾くがよい。そしてすべてアッラーにお任せ申せ」（『クルーアン』八：六一）などなどと主張されている。

むろん、ムスリムではない世俗的な立場に立つ筆者は、中国ムスリムが唱える平和主義を深く理解するには、幾多の困難がある。しかし、少なくとも、宗教共同体の構成員でありながら、近代的政治原理のもとに成り立った「国民国家」の構成員でもある中国の回族に樹立された「愛国愛教」という用語から、イスラーム的な平和主義ということを、読み解くことができるといえるだろう。換言すれば、「愛国愛教」という中国に忠実であれとする愛国心と、そのイスラームに対する敬虔心の間に、矛盾が生ぜず、衝突が起こらないことの根元は、彼らの平和を希求するというイスラーム的平和主義につながっているといえる。

また、「愛国愛教」という理念は、「民族宗教」、「全民信教」のような、様々な宗教信仰に対する、寛恕的で、しかも柔軟な認識を採っている環境、つまり、宗教信仰の自由を唱える多元化社会を迎えつつある中国のような環境でこそ実現できるのであろう。

二〇〇一年の「九・一一事件」以来、テロ組織の掃討や中東民主化という口実によって、アメリカの対イラク攻撃、アフガニスタンなどでのテロ組織の掃討、それに相次ぐ爆発事件などによって、イスラーム世界あるいはムスリム民族のイメージが混乱させられてしまったようだ。このため、「イスラーム」は「テロリズム」、「ムスリム」は「テロリスト」に等しいというイメージが、次第に固定観念化されるのではないかといった危惧を抱いている。

筆者は、文化人類学の視点から、中国少数民族研究を行っている。宗教や政治は、手にあまる課題ではあるが、どの文化も民族も同等の価値をもつとする相対主義の立場に立って、文化の多様性を解き明かすという文化人類学の命題のもとに、中国人であり、ムスリムでもある回族が抱える理念や考えを通して、ムスリム民族に対する固定観念を相対化することができるなら試みてみたい。

注：『クルーアン』の引用文は井筒俊彦著作集 七『コーラン』（中央公論社、一九九二年）によるものである。

（愛知大学現代中国学部助教授）